

はじめに

筆者は、長年、仙台の大学に勤務して、古代蝦夷を主要な研究テーマの一つとしてきた。そのような研究環境もあって、陸奥国、それもどちらかといえば、現在の宮城県が律令国家の北辺部であった奈良時代の多賀城や黒川以北十郡などを中心に研究をしてきた。それが出羽国にも興味をもつようになったのは比較的最近で、『能代市史』や『横手市史』などの自治体史にかかわった(古代を含む通史編はいずれも二〇〇八年刊行)ことが直接のきっかけであった。現地を訪れたり、学んだりしてみても、古代の出羽国は陸奥国とはいろいろ異なる点があると実感したが、なかでも出羽柵や秋田城など、主要な城柵が沿岸部に位置し、南の北陸方面とも北の津軽、渡嶋(北海道)方面とも、主に海上交通によって結びついていることは陸奥国の城柵にはみられない興味深い特徴であることが実感できた。

本書のテーマである秋田城の本格的な発掘調査は、昭和三十四年(一九五九)の国営調査を皮切りに、昭和四十七年(一九七二)以降は秋田市による継続的な調査がおこなわれており、膨大で貴重な調査成果が蓄積されている。その概要は平成二十八年(二〇一六)に遺跡のある史跡公園高清水公園内にオープンした秋田城跡歴史資料館の展示で学ぶことができる。

現在の古代秋田城研究の主流は、戦後の秋田城研究をリードしてきた文献史家の新野直吉・平川南両氏や、秋田城の発掘調査に携わってきた人々を中心とする秋田県の考古学者である。また元慶の乱に関しても、新野直吉氏や熊田

亮介氏など、やはり地元秋田の研究者が中心となつて研究が進められてきた。それにくらべて筆者は、同じ東北地方でも太平洋側の仙台を拠点として文献を中心に研究を続けてきており、秋田城や元慶の乱に関心をもつようになったのも、ここ十年余の比較的最近のことである。このような立場や研究時期の相違からして、秋田城や元慶の乱のとらえ方が主流の人々と異なってくるのは、むしろ当然のことであろう。本書では、秋田城や元慶の乱について、文献史料を中心に秋田の外側から研究してきた立場から、秋田城の歴史的 성격や元慶の乱の意義の検討をおして、古代秋田地域についての新しい歴史像を提示してみたいと思う。